

チック症発症の仕組み解明

神大など、神経回路の機能異常

神戸大などの研究グループが、チック症の発症には運動を制御する脳領域と情動や感覚を処理する脳領域を結ぶ神経回路の機能異常が関与していることを明らかにした。チック症は前ぶれの症状として「ムズムズする」など不快な感覚を伴うことが多いため、運動だけでなく、情動や感覚の脳領域も関与していると考えられてきたが、詳細な神経メカニズムは分かっていなかった。

研究グループの神戸大学大学院医学系研究科の橘吉寿准教授(51)は「心と身体をつなぐ神経回路の異常がチック症を引き起こしていた。運動と感覚、情動をつかさどる脳領域はそれぞれ独立しているわけではなく、密接に関連していることが分かる」と話した。

また、チックの症状を示すマウスを使った実験で、視床髄板内核と島皮質を結ぶ神経活動を人工的に抑制すると、チック運動やそれに伴う異常な脳活動が減少し、この回路がチックの制御に重要であることが分かった。

研究グループの神戸大

チック症は、首を振る、肩をすくめるなど、素早く引きつるような動きを規則に繰り返す「運動チック」と思わず不適切な言葉を発してしまう「音声チック」がある。小児期に発症し、成長とともに治ることが多いが、大人になっても続く場合もある。

研究グループは「視床髄板内核」と呼ばれる脳の領域が、運動制御に深く関わ

論文は生命科学の国際学術誌に掲載された。

(長谷部崇)